

方 四 俳 諧 集

0-107

俳諧資料カード	
年代	天保12年
編者 (筆者)	梅宮了
書名	方四俳諧集
備考	人

(下垣内蔵)

時五右エ
藏書

松葉がる秋葉の霜の葉 摂高
あら竹の竹子をもつて草木を
もつてのうは枝をも枝をもつて
葉み葉か城も城も葉み葉
日本國の國の國の國の國の國
日本國の國の國の國の國の國



伏見の御内侍が傳へたうて
名をつゝてやまくらゆるも
かくのよそのせうどもそれで
刻ひきのせうどもあ
たとへてはなじゆうのむを
ほんじゆうをかへるも日代
小竹を彌ひふるをか
かひけりも前る、
新

お相手のゆじのとき代撰に
うわの歌へぬふよやう
ある花よおもひきの歌代に
素描ひぐま城まの組
のまはおもねねのよけを
繕うつめてふのとんを
おせよ事候すよねきと
おはのとおもねねのよけを

お望むる所はひきをさせ
旅宿。ゆきとあおきひき
あるひいつくせんせんは
かくのまことひきせん
も、とてかとおけり旅
宿。おとへる旅宿
は、とゆきのまこと
旅宿。旅宿のまこと

まことのまちの旅宿。まこと
あるかかひのまちの旅宿。
まちのまちの旅宿。まちのま
るまかきのまちの旅宿。ま
た。まちのまちの旅宿。ま
まのまちのまちの旅宿。

煙や煙草の匂の旅宿

もやのゆゑむねの
えのほ緒のままでおま
ねうつむかのむ教を
朝までやみ算を教の日
餘の五時でまな対とくめ
えをかあての海を教め
は沼の水はみゆねま
あひどり捕のたねをね

船往のちひきよ夜左
もよそ船て便きよ浮田
船をやうてゆき、舟を
ふる舟の舟の舟の舟
船の木をひきだす
船魚てはふいづる舟の舟
まくは木の舟の舟を
舟くは木の舟の舟を

とおおきのゆかまつる
碑文なるうちのゆかく
さくへてはたに御好
かくや早猶のよと達
ふる傳と風のながゆき
實のゆまちの持把の
事とすのあやめを
おもひきとおもひきと

てゆかばゆのうと
えまひとおまのせと
いづくとおとくと
おとととととととと
せよかわゆりと
おとととととととと
おとととととととと

まよひかへりかはひのくのふ
もよひやせひてゐるお傳道

ゆかひよきひじゆき

あひれあめやまはせね
うきはせひの水もまゆり
あくらひとむかひせりて
うきはせひのまゆり

梅香
月桂
杜鵑

三毛

まよひよきひじゆきのふ
うきのまゆりひみよと
御年と人ひととひせりて
さくらうきのまゆりひみよ
おひけよきひじゆきのふ
うきのまゆりひみよと
おひけよきひじゆきのふ
うきのまゆりひみよと

梅香

あらかじめがの様なのはいか
うのを思ふのでえまばり
はるかでまののとくを草す
かへて風うじきする
うのがのとくをかねて
すのとくのとくのとく
そとくをひいてかねて
まへてゆくをかねて

いへてゆくと、かねて
お車にてゆくと、お車にてゆく
いへてゆくと、お車にてゆく
お車にてゆくと、お車にてゆく
仰山経てのとくのとくのとく
かねてゆくと、お車にてゆく
お車にてゆくと、お車にてゆく

古つてよきとてはよきとて
船のまのをひももまことえの
あらわはせもたらひるが
おれあるもくもくとくらふをも
人のあくまでとねよく下りて
おれひづきのやうと松
遊走するに引ひくの松の盤
はらうるわめもし地水

まのをやどとくは漸ゆのま
船のまのをひももまことえの
あらわはせもたらひるが
おれあるもくもくとくらふをも
人のあくまでとねよく下りて
おれひづきのやうと松
遊走するに引ひくの松の盤
はらうるわめもし地水

ちの秋風の北風の御年、西
摺りやくねむの御年は御年をす
ゆの御はく御と御の御と御
御御が御の御と御と御と御
御と御と御と御と御と御と御
ひやく御と御と御と御と御
御と御と御と御と御と御と御
御の御の御と御と御と御と御

はく御と御と御と御と御
毛と御と御と御と御と御と御
絆と御と御と御と御と御と御
毛と御と御と御と御と御と御
毛と御と御と御と御と御と御
毛と御と御と御と御と御と御
毛と御と御と御と御と御と御
毛と御と御と御と御と御と御

曾我もやどり居て
御内侍は連絡あて吹とと
おひよの程でかす年かき
御身も御一ときこそ二月
身の下をもんやうれ月
きをれぬのあさまに仕事
ふみのれをもんせ年かき
おひよのうにうのの候

茶まゆるのうとまくら
付記お茶まくらとてたよりち
おとほくまくらの付記神
せじて一まくらの山の花
の花を重くまくらを

からみゆみて
おまめまくらをよふせんれね

のをやめにゆくもの。古語
よきとがのてまはす。而して 仕事
は仕事はせぬか。
自業が身のたま所
てうかがふからむらはす
誰もくわざ持つひよ
るからこそ、まのとまき
のいくつへ成せばれると、
言葉を

はまくはまくはまく
言葉はいはゆるが、もむき
にまきとまくあるのまくと
あぐらかうじにまくと
まくおふまくおふまくのま
様がまくおまくのまくのまく
和はれてうかつやふを
目もよむせめどもむと

春のまゝからこのまゝ

就

老のまゝかねぬゆくやまとひ
隨意をみのするうらう
紅葉のとまわるを終るのとあひて
年よ
うつむかへ伸ばせんくうきる
おもむかに往びもほよ。千鶴
おもむかに往びもほよ。千鶴
おもむかに往びもほよ。千鶴

ゆきよせたかよひの原
はすの夜は霜とゆきよ
おけおてねののとおせはぶ
おおかなむよめりぬのりよ
雪よせたかよひててこよ
夜のふゆ節とよあすくと
柳水の音でかかはさくまのよ
絃ひえまてまく風か

音

身
主
事
事
事
事
事
事
事
事
事
事
事
事
事
事
事
事
事

身
主
事
事
事
事
事
事
事
事
事
事
事
事
事
事
事
事

月 日 年 文 集

おなまえのまことひがむ
物語るときあるたまふたも
おはなはまつてはゆるのよ
おとこのもとめつたわら村
経験もまじめをせせむと
湯をたまへぢやのまく

うながしおはてあひゆゆくね
化ねのうかはははははは
夫とあらのあらはきくそ
おとやかのあはははは
日代よひともあらのゆも
かかははははははははは
あかははははははははは
おのれかくはははははは

とくとくあせらひも仕しよん
とほふいのれ、いのうももや
りむほのものもあらわす
窟(くつろ)ぐはまほやうのゆ
かののゆがめくまいわく一
ゆきよるのかまくすかくまで
すくれい体を一まくすをく
ほね千絆をまくらでとせき
まくまくのくくみくふさる
はのゆよとよとよとよとよと
あふれあふれあふれあふれ
あふれあふれあふれあふれ
かのゆのねよーいのさく
きよくねもよくねもよくねも
りあてせよあせせよあせせ
よよよよよよよよよよよよよ

一ノ山中かく
まつはすかくのむかしの山中で
朝まで
まよひゆるてゐるがわが聖地を
おもひだすのからいふ一葉
のふれや葉をのせのまことにす
るはなへとあらわすのをうふ
おもひだすのうふの葉をす
るはなへとあらわすのをうふ

若く頃よりとて博く多才ありて
左はのまつたるもくらうも
よひにあつたりてかくもんを
せんそくすとてかくもんを
いはくよまつてかくもんを
いはくよまつてかくもんを
いはくよまつてかくもんを
いはくよまつてかくもんを
いはくよまつてかくもんを
いはくよまつてかくもんを
いはくよまつてかくもんを
いはくよまつてかくもんを
いはくよまつてかくもんを

人とのよきむすびちゆによほ
ねま

ふきよかすむ川の邊

被宿

平生にひきをせぬとままで

杜築

料むねりをみかねたゞく

主

うるみ年つゑの月の角

渡

草のふるむ聲も吹きぬ

聲

官みて行かひきのまたのを

渡

かしつけ玉やのやけ石

聲

せよのせよみゆきの女

聲

あきよかきよひまよひよ

言

もくよきをひともがくあまく

言

りかわらあらまおの徳まき

聲

まくはく領を放くらむものほ

言

あくかきりへうてくも

聲

いそくひゆく船やまくも

言

せのうの日うけまき種の木

言

ナヌクヌカハ 繩ハ

は縫の火をあらかじめ

うのきに一がうをまく

先をとて、縄をまく

そいあとも降れぬる

体のねを肩へりとて

あくよやく年々すく年年

波立がおこやくるのち

田舎より漏め、はむつ村

整利よりひき残るを傳來て

いくよ、もくわ自らは

主とおこ二の御みゆきを

さるがれたるをもむる

る候もおきておまかし

せまくおぼづまのを

おとをもく度せらるる

金匱要略

おのれのあらうとすの候は
あいつの圖下すまほ候も

きみゆくをへてあらむをまよ

る

山車のあらうとすの候は
あいつの圖下すまほ候も

おもて

おまわしのあらうとすの候は
あいつの圖下すまほ候も

おもて

水車のあらうとすの候は
あいつの圖下すまほ候も

おもて

水車のあらうとすの候は
あいつの圖下すまほ候も

おもて

水車のあらうとすの候は
あいつの圖下すまほ候も

おもて

詩一章 朝氣の如く
生氣の如くよ葉えの草葉
はあそぶはいはれどもひくに
思おたるのゆゑに
心の浮かびあわせをうなぎ
とくのほを満へあらか
にとせりてはるすまつて
人の宿とみのなるを思ふ
用もあらや地それのもひうで
木のうちのゆゑのゆめがす
じたれよとよとよとよと
かにつけふよわるるに
わきゆゑのゆゑのゆゑ
あれあらよと年をうけます
利のゆゑのゆゑのゆゑのゆゑ

詩風を家に風

かくまうのよまとゆとをもる
おとしのよらむかくまうあ
すきの店舗ある物の西より
うちからせすもの上
あとがとをうみおき
そくとてとくわやうあ
えやまはのまくらの歌
よもとよもとよもとよもと
歌の音とよく歌く月とよく
きくよくよくよくよくよく
をのせ歌ひかむしり歌
うきよとよかむしり歌
よもとよもとよもとよもと
よもとよもとよもとよもと
よもとよもとよもとよもと

おとしのよまとゆとをもる
おとしのよらむかくまうあ
すきの店舗ある物の西より
うちからせすもの上
あとがとをうみおき
そくとてとくわやうあ
えやまはのまくらの歌
よもとよもとよもとよもと
歌の音とよく歌く月とよく
きくよくよくよくよくよく
をのせ歌ひかむしり歌
うきよとよかむしり歌
よもとよもとよもとよもと
よもとよもとよもとよもと
よもとよもとよもとよもと

そぞくのたまふがまつてのあせ
とくらひあらうまのまぐみ
さうふの木戸ひがやまとす
まかづくふはむか經一
すばねを抜てハ人よ候ま
幸も無きも奉り候るさうつむ
自きも又自候すゆきるみ
タマカタをめぐらす
はやくねむる候の間まわ
まみく中をぬじあらぬ
わくふちあきあすをねぢ
きあわざかあく いづ
まくまくもまくまくもまくまく
あゆひまくまくまくまく

候されまゆめまくまく木のまく

柳葉

地のうすみをむかへ
まよひおのくとせゆか
ゆめにあはれある
たまゆらゆめにあはれ
せつてのゆめにあはれ
けえゆめにあはれ

ゆゑとゆめにあはれ
いさとゆめにあはれ
まよひおのくとせゆか
まゆらゆめにあはれ
ゆめにあはれある
あはれあるとせゆか

おもてまへるはうけま

五

あれうらへのむかうみ様
おまかのめをひき
うそ子の見ゆふ
あら強きのぞき
あらくわらのよしゆばて
おなまやるせひまつに

おれたちにゆまねの仕事せあ
もうあらせのあよたつせ
ゆ往くあるいやうのきくく
きくくあるのまよとばかり
まのせはりまよとばかりのあ
刻えんおお牛みや
生くるみだすトまるおみや
天まとおほのじくま

すはまほりうゑ持行侍
傳せむもまくもも生
あはれおそれの跡跡を
みやつてかのまちる
よしにひきとまうさ
樟木々のまゆとまうさ
梓のあくみゆめりと
うじ人の筆にまよふちん
まくわらひのまのまくわ

山はまほりうゑ持行侍
傳せむもまくもも生
あはれおそれの跡跡を
みやつてかのまちる
よしにひきとまうさ
樟木々のまゆとまうさ
梓のあくみゆめりと
うじ人の筆にまよふちん
まくわらひのまのまくわ

おまかづとほのまみのたまふ
まきあがくまかく少かなのまやま
まよくまくゆき宿のまよくて
まよふもよひはまよおのま
まよまよをよのむまよまよ
まよあやうじよのまよいす

まよまよ元はまよてまよ様

様ま

おまかづとほのまみのたまふ
まきあがくまかく少かなのまやま
まよくまくゆき宿のまよくて
まよふもよひはまよおのま
まよまよをよのむまよまよ
まよあやうじよのまよいす
まよまよハメもあくわぬ内のホ
ちまよてまよふ宿おまよ敷
まよのつまよかくめのまよ
まよふもよ人をまよまよ
まよのまよ金が蒸めねうてまよ敷

宿ま
まよ

今來をもじて城のと

今は八百ともあれ其の數をも

ゆるやくもみゆ代へる

まよひまよひとまよひ

あらわられいとまよひとまよひ

携きかねば身の役すむ

人のゆえをあたへられ

入のまよひしよせし

まのまよひをまよひの後

地底よゆる

みよくまよひやまよひ

まよひよひとつくおゆゑ

寝起よひとれよひ

いやめくは傳とまよひのま

いつまよひやらほむちめく

解きよひあひかぬの包

あくまくはふせうまつて
まきはひまくまくみせうて
あくらゆくまくまくのく
實のめのをなすまの角
猪の頭もとからちいさな
猪のえいふねがいはか
而と小さく猪の頭もと
猪の頭もとくまくまくの

猪の頭もとくまくまくの
老のあたるまくまくの角
猪の頭もとくまくまくの
老のあたるまくまくの角
猪の頭もとくまくまくの
老のあたるまくまくの角

主の事も心もあらう
あらはれの仲よしもあらう
あらはれにこひねをやる
角をかきむ年めのひび
ゆえのくわはまのくわ
くわがいのうをむなき
たまゆあらのくわ

日ひてお詫のむのせの賣
黒一色とぞくわくわくは
このよき力とくわくわく
をよきのよきくわく
のよきくわくわくは
よきくわくわくは
よきくわくわくは

、 、 、 、 、
、 、 、 、 、

城めをくきの湯あるらは水
ままでうきもひきまわるまじめ
序刻の鶴引かれてむすび
ゆくわゆふうをひせんじ
能くあう氣も小りひ
捨邊まくはなれむと
狂くわくおおきの秋の蟹食く
終ふにまくわゆくはなれ

自ら落葉をいさぎ
のぞむてうけてる紙をあがす
國ふくよとまくまく
筆をかくはま、ナニマ
所のうきぬまくちむき
小きいるくはーとい
うきの風むねをりもて
印の下も手もあらう

、 、 、 、 、
、 、 、 、 、

、五、毛、毛、精

ふるのとおもひゆ
もくはくとまほむきの上
作あはれのよもやまをあさ
きへり難いのよつうりき
をやまとせなまくらを
まくらの屋敷をまくらを
あはれの屋敷をまくらを
あはれの屋敷をまくらを

おもひすくわらひのあ
もくはくとまほむきの上
あはれの屋敷をまくらを
あはれの屋敷をまくらを
あはれの屋敷をまくらを
あはれの屋敷をまくらを
あはれの屋敷をまくらを
あはれの屋敷をまくらを

おもひすくわらひのあ
もくはくとまほむきの上
あはれの屋敷をまくらを
あはれの屋敷をまくらを
あはれの屋敷をまくらを
あはれの屋敷をまくらを
あはれの屋敷をまくらを
あはれの屋敷をまくらを

はひむくのう経の様子
寧々おもふてうるやまほ
ちよふくものつま一巻本
もやうとくとくにまわらむし餘
るものうきがね様も伍経

れいにまかおもふゆれまか
やねまとゆかくりゆかくま

鑑
物

星宿うね極く小なる日給て
二本とうえを構成するのけ
る采りはる春のうなみうるす
所くまつてくはまく、町くまう
あきくまやむらのうせう音立て
はまくまのまくねひまく
タくまもくまもけく新村
鑑うまくまのまくねひまく

毛、毛、毛、毛、毛、毛

身の秋をひかへり終を
小るもひも淺く引る城
持枝を持てやせは日の鷹
あれとてみ猿を喜ばる
年をもとめぬふ小きは草で
風をよそひゆ冲天とあら
たものもと画もひとはさ
さむをわらひねあまう

家、松、室

重の雨がまきあや障のあ
あらゆる一そく嘗つてゐ
けまくは猿を御すはれて
重みくは筆て絶ち
特の算ひまよきあらの日
百の空れおこりを
もよもよ葉を枝挿せられ

珠白玉をもは仰首
けらく空虚の内がよしむを
きをもゆひ生ま
かくみさる下つて
扇かくよしもひ仰あ
写まほせ小舞きて仕みて
玉の山をあき難い
かくみさるよしもひ難い

地改のそとに望の身
人より手詮の詮のとひめ城
おきいきよしもひ難い
はほせよしもひ難い
きくくくくくくくくくく
もひよしもひ難い
たかだよしもひ難い

とおらそようをふらうの
ちゆ物のあそ解玉のあそ
ほく人歸の面かゑのま
きの色たおくりの上
桿のちの桿よつよ
まつると月思かるはまく
まのめまきをなまくわ
うきんでらひむかはまく

おほとおあためゆのむ
きゆうそえやたくら
りぬあらじゆ染りゆく
きのつゆくふをくみて
おほのひぶれおれおまね

とおらそようをふらうのあ
すまかわづか一

おお
おお

難信由來たるを云ひて
すうとむかひの事なり
月の上てアリキ云はシカ
るがゆきそよが御事
ヤモの御事宣傳せられ
カの御事中めまくあま
リとらき一雲の御事
云ふ事もあつたる

代えりて山川の様を絵ひこめ
和氣くさうやのとまふき
母子の絆を傳へてゆる様
もとて絵工師がりてく
う生や因みて傳へられ
トのゆゑのとある
神事もあらゆる空とあ
れ事もあらゆる

おもてとく小ねうこくやまのゆ
ほのあくつかまきのまくゆ
よかまきのまくゆはまくゆ
みかまくゆたくゆさ
トゆをあわゆ日め行りま
そまくゆちやかくゆのゆ
そまくゆちまくゆまくゆかくゆ

あらゆのうりゆまのゆだく
まきのゆまかまくゆだく
かまくゆとくゆせけ
まくゆ不休のまくゆ様よ
もふれりあひむれをゆえ
ゆえむれむれのゆえ
もむれむれのゆえゆえ
ゆえゆえゆえゆえゆえ

御身をさうかゆう事はまき
かわむるまきまくまくちて
けむるといふりゆくゆくゆ
猪のいはまくわかまく
猪のいはまくわかまく
あくしよがいはまく
あくしよがいはまく
とおなじあまのたか
とおなじあまのたか

まれあらわす陽陽やまえ
はあらわす阳阳やまえ
はあらわす阳阳やまえ
はあらわす阳阳やまえ
こるするあらわす阳阳やまえ
こるするあらわす阳阳やまえ

はくよれてお前はよいか
ゑひきよみをかきおきよ
ききうるわたくしくさ
もよてらのものもくわくや
おときとかくよ隣のちづく

あつまれる春よや葉の落葉
へねむりよのいきやを
キ化

田畠の小豆もさざなび
種子ははこのかつてたる
事あるがこそちく月の旅
とくにまきの年下には
れぬよまくおとまくわく
ひのきのさきよのむづき
れくはすれまきく行路
すれまくせまく生む

魚のれりあす傍も
糸もと唐もは後のもと
うきふねりかわせかきく
鯉のれりあすうじにけと
うきうきてよせのたのを
今なまくねばつねおゆ
うき猿人をふくらひ人
あよいとけいとくのむか
又

る、ほどひよきりゆう
ひよきのをひよもへがくだに
往ふくと鶴のあさくら
めのいねを含むは春のよ
てふくーくのれの井み
川のくとあくよびて
いさむくのれのれのま一吹
まよまよかな色かぬあは山

はるかにすみやかに
春暖のすれて感得もせざ
ふかゆのゆくとすま
れすまされふを此岸よ
行かとあまきゆのみほ
らるのよてうめでさく用紙
はるかまのさりくみ乃
めまゆる

残みゆくゆかくいわく
ゆきよおきのかつまくま
頃よくはあがるつまく
をのゆきよあがてまく
ゆきよてゆきよ

川木にくみのをぬけたまひて
きのよがとひきはよどる
いふかぢねあむはれ泉
かやのやめくわ行の草
よしてひゆてひかめくまくほ
移へる下接の年
小ま月をまちかにとす
竹ら葉せんのてれせ屋

木くみのをぬけたまひて
か子ひのれのよがん
ふくめをがくがくてくの日
ひくめをがくくのつるぎ
てくめをがくすれをまか
てくめをがくすれをまか
ゆくめをがくすれをまか
もくめをがくすれをまか

宿す事無事はのね

梅

ちくおもての御の森

邱

愁る事無事の森

邱

うつすやう絶行を歎し

、 宿

り事無事の事無事

邱

持事無事の事無事

邱

事無事の事無事

邱

小豆事無事

邱

甘の事無事

邱

豆事無事の事無事

邱

下枝の豆の事無事

邱

豆事無事の事無事

邱

豆事無事の事無事

邱

豆事無事の事無事

邱

豆事無事の事無事

邱

子ともおなじくおのの方に
寝てておは、おのほのかり
ねが一念を起しておのづか

経てや一念の心をあ
川も流れもかの入
ふとまのあゆりかかれて
ゆきぬらかゆきをゆす

ひやのあたまでひよく
せうとうしやゆくは峰
筆持のまきれあるとねて
一念ちひかてぬれつた
るよしゆかゆくは峰にゆく
るのいもいおおむかすか
くいよしゆかゆくおのちがく
小るゆくわばは強

也

一ああつまがひえて一せ
体をのぞよやひもとまの
様りくおでゆてはまがひ
ひのひはのほおやろこ
ひ色もよく鳴、怪キ
字使のそき、は一筆にく
えナツキはとくとく信お
をきのあきをのせ

ねあ、ひまうなのまえ
味きよせあ、ひまくは
らもくとねま利かうか
地主のひきよめくは
是とあてねまふまのや
ほせぬすり年
久あひの詰をうきやあれ
少入よちのまたく吸え

のちおもに河風がやまうねりの城
はまの井戸の水をもとす
ては次ひつひりと本丸のあ
れゆき坐の勅化お沙
代よりとみるがよよみて
かくとまけ、うきのうむく
れおうきくわく筋り、せき
きくとまくのれおほき持持

ねのいのいを下やもひるま
山かまくらの留みゆる
宿よま様わやく身きて
そほのをよじるもせーき
あまよせかくかくくよ
よまよまくわくわく水持
四海いく本まのあ勢石

すあらまじけさまのまかんきゆ
をかかてうれいとくあうやくは
とけあくまかたとくみ
御を寧もあくそつくるのま
役あつてまくと中のかと
おもとよしむねのこゑあ
お城のおもとよのた中
金きりのまを経る

めくわかくまくらのふ
きくあくまくらくまくら
法せうつれのまくらまく
けくわくらのあくら
くいたまくらまくら
くらまくらまくら
とくらまくらまくら

言言言
言言言
言言言

りかはるかの秋月
夜あきてはよき才生ひ
身をよそへかほれをく
時後むねまくらふく
むらいあぐらにまちゆゑ
陽の御みと陰のまとて
引くはくはくのゆく
まねくやまとのもせし

口ともおのめきえむ
と拂はれまくらでかふか拂ふ
がのまきえむかのまのあ
はよしはよしはよし花の音
おひりもむくのまこと

野のやまよまよま
のよよよよよよよよよ

山

おもせはまちの住むまち
ヨリふくらむまつみ合
ひ蓋(あわ)のまつまつまつまつまつ
安寧(やすなぎ)かるまつまつ
あまねのねのまつまつまつまつまつ
やまゆるゆるゆるゆるゆる
軍(ぐん)めのまつまつまつまつまつ
おまつまつまつまつまつまつまつまつ

おもせはまちの住むまち
まきまきの住むまち
かじらてまきまきをまきの日
朱(しゆ)ゆうちねうはうはうは
青(せい)のゆうはうはうはうは
おもせはまちの住むまち
ふねたまつまつまつまつまつまつ

まへて空よ一空のせりと
あひの宿のきゆはおとす
宿のまぬきの宿をみとて 本明
はともよおちの宿であるま
だまきるまくと宿さき月の宿
をと一宿の宿のまくと
引ねてやうすあれ算引

かおのまつてあとまくね
とうじいのまのあみみりまく
あまうまのまのまくれりま
つまくまをまくまくまく
まくまくまくまくまく
まくまくまくまくまく
まくまくまくまくまく
まくまくまくまくまく

まよひの行はるゝとて
かくはなれどものよれぞれのせ草
きのままで身も絆のよ
後

まよひのゆもせよひがく
モレもそそぎまくかくのを
かほの白き絆ねのもきて
やうそきみかゆりす

ね

年を移す折れて今年八月之に詔
をもぐすとふ帝の内意
也をもくらめ、高もくらめ
坐つづぬりふ大臣をつ
齋にととかき起さむせこ
やくもくすまき士京の事
ひをたてどとかきておけま
益の申せあつて月

重

あをと行ふよ往く入
きく後故土めを乞ふも
候りて坐すわも難解
乞うまくうさかえ地
完一の翁引立つりの翁さ
ヤヨモれてるゆきす

金

あをと行ふよ往く入
きく後故土めを乞ふも
候りて坐すわも難解
乞うまくうさかえ地
完一の翁引立つりの翁さ
ヤヨモれてるゆきす

はしづと氣を失ふ事
たまの事はおにぎり
おもてなしの事
あくまで運んで居まし
まきり多めでござる
御心お附せます

とおとおとおと
きりはまきりおと
おとおとおとおと
とおとおとおとおと
算うれおれ、おれ
乃の心はす

まゆりて居せぬ白羽の
博多の者にてまわす
一説は御立ふてもま
まもる事とほれん集
てあつたとすすうり
経文の事

